
見世物少女と貴族少年

霜月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見世物少女と貴族少年

【Nコード】

N4604Z

【作者名】

霜月

【あらすじ】

見世物小屋で働く少女カータはある日、貴族の少年オズに出会う。「三回目の三日月の日から満月までの遊び。」はじめはそのつもりだった。

prologue (前書き)

こんにちは、霜月です。
頑張ります！

prologue

「さあさあ皆さんお静かに」

甲高い声がテントの中に響いた。

マイクを手にするのは 足なしピエロ 文字通りこのピエロには足りない。

「今日も始まりますよ、天から見放された人間たちの恐ろしいサーカス」

客席は満員。国のお偉いさんや上級貴族で埋めつくされている。

ピエロはいやらしい笑を浮かべながらナイフを一本出すとサツッとステージに向かって投げた。

これがこのサーカスの始まりの合図。

人々は一斉に大量の拍手をし、歓声をあげた。

ここはレスタツカ王国の端にあるヴィオリークの森。

通称『悪魔の森』。

ここには一級見世物小屋『リキュータのサーカス団』がある。

リキュータとはレスタツカの言葉で『悪魔』という意味。

ここでは人として生まれなかった人間ものが集い各々の芸を見せる。

「さあ、貴方も見ていきますか？」

おや、いつの間にかあなたの後ろにも人の形でないピエロが誘いを掛けていますよ。

prologue (後書き)

短編で書いた作品が評判だったので、広げてみました。
題名は変わってないので読みたい方はそちらへ。

見世物少女の居場所（前書き）

稚拙な文ですが楽しく読んでください！

見世物少女の居場所

「…な。…カータ、起きな。」

カータは自分を呼ぶ声と布団を剥がされた寒さで目を覚ました。

『もうすっかり寒くなったな』

と一人で思っていると、カータの部屋に怒声が響いた。

「カータ、朝の洗濯当番はアンタだろ！さっさと起きな！」

「分かってるよ、リテンダおばさん。だからあともう少し…」

カータはそう言うのと体育座りのような形になって二度寝を始めた。

リテンダと呼ばれた20代後半ぐらいの女性はカータから剥がした布団を畳んでいたがそれに気付くと、自分の手をカータの首筋に当てた。

「ヒヤッ！！」

小さな悲鳴を上げたカータは体を起こし泣きそうな顔でリテンダを睨んだ。

「リテンダおばさん、最低…」

小声で呟くカータを見たりテンダは側に置いてあった洗濯物の入ったカゴをカータに渡し、

「さつさと川まで行つといで。アンタは寝ぼけてるから、ついでに顔も洗つてくるんだよ。」

と言ったのでカータは不機嫌そうな顔で

「はい、はい」

と答え、寝間着の上から御下がりのボロっちいマントを着け重たいカゴを持ち自分の部屋を出た。

長ーく続く廊下の左右にはいくつもの部屋がありそこで寝ているみんなを起こさないようにカータはそつと歩いた。

カータがテントの出口まで来たところでカゴを一回置き背伸びをしていると、リテンダがカータ部屋から顔をのぞかせて大きな声で

「人に姿を見られてはいけないよ！今、見世物狩りがあつてからね。気を付けなよ！」

と言われたので、カータは振り返りもせず

「分かつてるつて」

と言うと寒い外に走っていった。

カータはしばらく走って、立ち止まった。

髪を揺らす冬の風はやっぱり冷たかったが何処か心地よかった。

テントの横の掲げられた大きな旗はバサバサ音を鳴らして風にはためいていた。

そこには妙な色彩で

一級見世物小屋 リキユータのサーカス団

と書かれている。

ここがカータの居場所だ。

それなりに非日常の中の日常はカータにとって幸せだ。

見世物少女の居場所（後書き）

ありがとうございます！

見世物少女の回想（前書き）

今日も元気に投稿します。

見世物少女の回想

テントから東に大体10分歩いたところにヴィオリークの森、唯一の川がある。

カータはそこに着くと履いていた靴を脱ぎ素足で真ん中の辺りまで行き、手で水を掬うと顔を洗った。

足にジンジンと伝わってくる冷たさが段々と痛みに変わってゆく。

「夏は気持ちいいけど、冬は辛いなあ」

と独り言を言いながらカータは顔についた水滴を振り払うと、空から漏れ出る光で輝く水に自分の姿が写っていることに気付き顔を歪めた。

亜麻色の髪に蒼色の目、そこだけを見ればカータは普通の少女なのだがカータの外見は人間とは異なっていた。

頭に付いている耳や腕と足はまるで獣。

おまけに背中の下辺りには尻尾が生えている。

生まれてきた時からなのか見世物小屋に売るために縫いつけられたのかは分からないが、とにかくカータは物心着く頃からこの姿だった。

そして人間たちはカータを見ると必ず同じことを言う。

『醜い娘』

母親に最後に言われた言葉もこれだった。

見世物小屋の皆と生活できることは楽しいが、どうしてもカータはこの身体を好きになれなかった。

歪んだ記憶の断片を思い出してしまっから。

バアアアン

突然、森の中に響いた銃声にカータは回想を中断させた。

そして、顔を真っ青にして焦って靴も履かず茂みに身を隠した。

肝が冷えていく中、カータは朝のリテンダの言葉を思い出した。

『今、見世物狩りがあってるからね』

見世物狩り（ミセモノガリ）

狂った貴族の遊び。

政府から人権を認められていない見世物を無差別に殺すか他国に売りさばく事。

見世物少女の回想（後書き）

このお話を読んでもくれる貴方に感謝！

獣殺し（前書き）

冬休み！

どんどん投稿しまくるぞ。

獣殺し

見世物狩り… どのような形でもカータにとって関わりたいものではない。

細かく身体が震えているカータは唇を強く噛み締めながら目を瞑り、只々この足音が遠ざかるのを待った。

しかし、次の瞬間カータにとって予想外の出来事が起きた。

黒い物体が茂みに倒れ込んできたのだ。

反射的にカータは四つん這いになり戦闘態勢になったが、黒い物体は動かない。

近づいてみると、それは黒の綺麗なマントを羽織っている人だと分かった。

顔は口からしか見えていないが、体つきから見て、カータと同じくらしいの少女だろうか。

マントは相当高級そうだ。

どっかのお嬢様ってところかな、とカータが思っていると、少女が弱々しそうな声で

「たっ… 助けてください」

と言った。

銃声、お嬢様、近ずいてくる足音…。

しばらく考えてカータの脳内にひとつの答えが導き出された。

「ああ、山賊か。」

ヴィオリークの森には山賊が数え切れない程いる。

こんな森に一人で迷い込んできた弱そうなお嬢様なんてそいつらの格好の餌食だ。

多分このお嬢様もそんな流れでここに倒れ込んでいるのだろう。

面倒ごととは嫌いなカータだが、目の前で山賊に少女が襲われるのを黙って見ているほど薄情者でもない。

「ここは助けてやるか」

溜息混じりに茂みから出てきたカータをお出迎えしてくれたのは二人組の山賊。

一人はヒョロっとしていて出っ歯。後ろに立っている男はマッチョ。

そのうちのヒョロ男（ヒョロっとしていて出っ歯をこう呼ぼう。）がカータに向かって大なたを向けた。

「お嬢ちゃん、こっちに黒いマントの坊主が来ただろ、大人しくそいつを渡しな。」

語尾にヒイヒイと引き笑いをしたヒヨロ男は勝ち誇ったような表情だ。

勿論、カータに取って大なたなんてもんはサーカスで日常茶飯事に見る品だ。

驚きはしないが、本格的にしないと殺られる。

カータはマントを脱ぎ捨て戦闘態勢になった。

山賊の表情が険しくなった。

初めてカータを見る人間と同じ目だ。

ヒヨロ男は大なたを落とすと、後ろのマッチョに

「ヒートロック、あいつみせもの悪魔だ。」

と言った。ヒートロックも頷くと腰に下げていたバックから紙切れを束ねたものを取り出し、何枚かめくると顔を青くした。

「おい、ヤッソあいつはやベーぞ、リキュータの 獣殺しだ。」

ヒヨロ男ことヤッソも目を大きくして

「やっベー、に、逃げるっぞ！」

とかなんとか色々言いながら山賊二人は逃げていった。

獣殺し

それがカータの俗称。

由来はそのまんま。

サーカスの舞台で披露する芸から。

獣殺し（後書き）

ありがとうございますー！ー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4604z/>

見世物少女と貴族少年

2011年12月23日22時49分発行